

平成 21 年 6 月 29 日現在

研究種目：基盤研究(A)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18251005  
 研究課題名(和文) 社会的弱者の自立と観光のグローバリゼーションに関する地域間比較研究  
 研究課題名(英文) Comparative Study on Self-reliance of the Socially Vulnerable and the Globalization of Tourism  
 研究代表者 江口信清(EGUCHI NOBUKIYO)  
 立命館大学・文学部・教授  
 研究者番号：90185108

研究成果の概要：本研究の目的は、社会的弱者が、不利益をもたらされがちであった観光現象を逆手にとって、自立化・自律化の途を進み、かつ近代化の過程で喪失してきた自信やプライド、そして「伝統」を回復することはできるのだろうか。社会的弱者の自立的な生き方に観光がどのような意味を持つのかについて、世界の多様な地域の事例の比較分析し、考察をすることにある。比較研究の結果、少なくとも4つの結論を得た。途上国における社会的弱者は、観光にかかわるだけでは自立しえないであろう。外部で作られた観光の概念やスタイルと現地の人たちの理解するそれらの間には、しばしば齟齬がある。自生的なリーダーとこの人物を支えるフォロー-関係の存在が、観光開発の成否やコミュニティの福祉の改善に大きくかわる。そして、女性の役割がたいへん重要であるということである。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	8,100,000	2,430,000	10,530,000
2007年度	7,900,000	2,370,000	10,270,000
2008年度	8,500,000	2,550,000	11,050,000
年度			
年度			
総計	24,500,000	7,350,000	31,850,000

研究分野：文化人類学(含民族学・民俗学)

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：社会的弱者、観光、地域間比較、自立、グローバリゼーション

## 1. 研究開始当初の背景

(1)観光客が地球の隅々まで進出する一方で、各地の少数民族、極貧者、低位カースト、貧しい女性などの社会的弱者が観光現象に直接・間接に巻き込まれてきた。ある人たちは観光産業に搾取され、別な人たちは観光客の好奇のまなざしに晒される立場に置かれて

きた。しかし、1980年代後半以降、このような人たちにも利益をもたらし、環境にも優しく、観光客も満足できる、もう一つの観光(持続的な観光)が先進国主導の形で提唱され、近年、途上国社会でも実践されてきた。しかしながら、多くの場合、理念と実践の間

には大きな齟齬が見られ、社会的弱者の多くが好奇のまなざしを向けられ、低い地位に置かれことにあまり大きな変化はない。

(2) ハーヴァード大学の故人類学者、メリーベリー・ルイスが創刊した *Cultural Survival* 誌などは、少数民族に不利益を与えかねない観光に対して、早くから警鐘を鳴らしてきた。しかし、本格的な研究はまだ緒に就いたばかりである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、途上国における社会的弱者が、不利益をもたらされがちであった観光現象を逆手にとって、自立化・自律化の途を進み、かつ近代化の過程で喪失してきた自信やプライド、そして「伝統」を回復することはできるのだろうか。社会的弱者の自立的な生き方に観光がどのような意味を持つのかについて、世界の多様な地域の事例の比較分析し、考察をすることにある。

## 3. 研究の方法

(1)研究代表者・分担者・協力者が以前から深く関わってきたネパール、インド、インドネシア、フィリピン、マレーシア、タイ、ベトナム、ガイアナ、ペルー、エクアドル、ボリビア、中国、そして日本の少数民族を中心とする社会的弱者のコミュニティにおいて実態調査を繰り返し実施した。(2)平成 18 年~20 年度の 3 年間にわたる調査を通じて、少なくとも上記 13 ヶ国での社会的弱者の観光への考え方、観光客、観光関連産業、そして国家との関係性について、社会的弱者自身の声がインタビューによって多数収集された。(3)また、質問票を用いた悉皆調査などによって、この人たちにに関する基礎的資料も収集された。(4)また、観光客へのインタビューや観光客が残したゲスト帳などの資料も入手でき

た。そして、(5)当該の政府機関の観光政策のあり方について文献収集や関係者へのインタビューなどを実施し、また観光関連産業関係者へのインタビューなども行った。

## 4. 研究成果

比較検討した結果、四つの結論の存在が確認された。途上国における社会的弱者は、観光にかかわるだけでは自立しえないであろうということである。観光客の到来は季節的に波があり、外部の政治・経済の変動を敏感に反映する。したがって、農業や漁業などの伝統的な生業を犠牲にしてまで、観光開発を促進することは、社会的弱者にとってはたいへん危険である。資本主義的な生産・消費システムに巻き込まれていて、現金収入が必要であるものの、あくまでも多様な職業の一つとして観光にはかかわるべきだということである。外部で作られた観光の概念やスタイルと現地の人たちの理解するそれらの間には、しばしば齟齬があるということである。エコツーリズムはその最たるもので、観光客、観光関連業者、そして現地の人たちの間では、自然環境そのものに対する考え方や態度に大きな違いが見られる。したがって、外部の支援組織は、現地の人たちの考え方を尊重し、十分に議論したうえで側面支援することが重要である。また、現地の人たちも、外部者の考え方を十分に理解した上で、観光に関する必要がある。自生的なリーダーとこの人物を支えるフォロー - 関係の存在が、観光開発の成否やコミュニティの福祉の改善に大きくかかわるということである。このことは、本研究への参加者の多くが参加した以前のプロジェクト研究で見出したように、スラム地区コミュニティの生活環境改善を実現する自生的リーダーとフォロワーの関係と共通している。コミュニティの意見をまと

め、外部組織と交渉し、外部からの支援を獲得し、生活環境の改善を実現する人物がいるか、いないかが観光開発の成否に関ってくる。

女性の役割がたいへん重要であるということである。女性が手工芸品を生産し、マイクロファイナンスを運用し、生活環境を改善する先頭に立つ傾向にある。このことが女性に自信を与え、そしてプライドを芽生えさせる。観光客など、外部の人たちとの均衡がとれた力関係を作り出すことにもなる。これは社会的地位の向上でもある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 26 件)

1藤巻正己、「マハティールの都市」クアラルンプル - 生産されるスペクタクルなツーリズムスケープ - 」、立命館大学人文科学研究所紀要、No.93、2009 年、25-54 頁、査読無。

2江口信清、「不法占拠地コミュニティの貧困の実態と自生的女性リーダーの苦闘 - ガイアナ・ベアルートの事例」、立命館大学人文科学研究所紀要、No.93、2008 年、101-132 頁、査読無。

3山本勇次、「観光都市ポカラの多すぎる銀行と多すぎるマイクロファイナンス」、立命館大学人文科学研究所紀要、No.93、2009 年、55-100 頁、査読無。

4江口信清「地球規模で進む観光」藤巻正己・江口信清編著『グローバル化とアジアの観光 - 他者理解の旅へ - 』、ナカニシヤ出版、1-16 頁、2009 年 3 月、査読無。

5池本幸生「ベトナムの観光と少数民族の暮らし」藤巻正己・江口信清編著『グローバル化とアジアの観光 - 他者理解の旅へ - 』、ナカニシヤ出版、85-101 頁、2009 年 3 月、査読無。

6石井香世子・チャイヤシット・アヌチット・ウォラオン「タイにおける観光と少数民族 - タイ北部「首長族」観光を考える - 」、藤巻正己・江口信清編著『グローバル化とアジアの観光 - 他者理解の旅へ - 』、ナカニシヤ出版、103-118 頁、2009 年 3 月、査読無。

7瀬川真平「世界遺産を観光する - インドネシアの場合 - 」、藤巻正己・江口信清編著『グ

ローバル化とアジアの観光 - 他者理解の旅へ - 』、ナカニシヤ出版、137-150 頁、2009 年 3 月、査読無。

8江口信清「マラッカの観光化とポルトガル系住民の苦悩」、藤巻正己・江口信清編著『グローバル化とアジアの観光 - 他者理解の旅へ - 』、ナカニシヤ出版、169-185 頁、2009 年 3 月、査読無。

9藤巻正己「キャメロンハイランドのオランアスリ・ツーリズムの可能性」、藤巻正己・江口信清編著『グローバル化とアジアの観光 - 他者理解の旅へ - 』、ナカニシヤ出版、151-167 頁、2009 年 3 月、査読無。

10ピーティ、デイヴィッド「ブータンにおけるツーリズム」、藤巻正己・江口信清編著『グローバル化とアジアの観光 - 他者理解の旅へ - 』、ナカニシヤ出版、189-202 頁、2009 年 3 月、査読無。

11山本勇次「観光立国ネパールの観光産業の脆弱さ」、藤巻正己・江口信清編著『グローバル化とアジアの観光 - 他者理解の旅へ - 』、ナカニシヤ出版、203-218 頁、2009 年 3 月、査読無。

12村瀬 智「インド・ベンガルの民俗文化探訪の旅への誘い」、藤巻正己・江口信清編著『グローバル化とアジアの観光 - 他者理解の旅へ - 』、ナカニシヤ出版、219-237 頁、2009 年 3 月、査読無。

13藤巻正己「他者理解への旅へ - よきツーリストをめざして - 」、藤巻正己・江口信清編著『グローバル化とアジアの観光 - 他者理解の旅へ - 』、ナカニシヤ出版、239-247 頁、2009 年 3 月、査読無。

14 Eguchi, Nobukiyo, "Is the Coexistence of Logging and Tourism Practicable?: A Case of An Indigenous Village Community, Saint Cuthbert's Mission in Guyana," 立命館大学人文科学研究所紀要、No.91、201-228、2008、査読無。

15 Fujimaki, Masami, "Tourism and Orang Asli Communities in Malaysia: A Preliminary Report of Case Study on Cameron Highlands," 立命館大学人文科学研究所紀要、No.91、171-200、2008、査読無。

16 Ishii, Kayoko, "Between Nationalities: Legal Status of Hilltribes in Thailand," 立命館大学人文科学研究所紀要、No.91、49-66、2008、査読無。

17 Peaty, David, "Rural Lodges and Homestays: An Approach to Poverty Alleviation." 立命館大学人文科学研究所紀要、No.91、31-48、2008、査読無。

18 Phan Thanh and Yukio Ikemoto, "Ethnic Minority People and Tourism in Vietnam: The Traditional Textile in Binh Thuan Province," 立命館大学人文科学研究所紀

要、No.91, 67-98, 2008、査読無。

19 Yamamoto, Yuji, "Tourist Industry of the Caste Society and the Socially Vulnerable in Nepal: Development of Pokhara as Tourism Town and Strenuous Effort by Thakalis of an Ethnic Minority Group," 立命館大学人文科学研究所紀要、No.91, 99-170, 2008、査読無。

20 Peaty, David, "Community-Based Ecotourism in Ecuador, Peru and Bolivia," 立命館大学「貧困の文化と観光」研究会国際シンポジウム報告集『社会的弱者の観光を通じての自立と自律』、36~44, 2008、査読無。  
藤巻正己、「「マレーシアにおける貧困問題の地域的・民族集団的多様性に関する研究」と社会的弱者およびツーリズム」立命館大学「貧困の文化と観光」研究会国際シンポジウム報告集『社会的弱者の観光を通じての自立と自律』、92~101, 2008、査読無。

21 Eguchi, Nobukiyo, "Tourism: a Key for Survival of the Portuguese in Malacca, Malaysia," 立命館大学「貧困の文化と観光」

研究会国際シンポジウム報告集『社会的弱者の観光を通じての自立と自律』、133~144, 2008、無査読。

22 Ishii, Kayoko, "Who Are the Hill-tribes?: Can Ethnic Minorities Gain a "Better Life" by Participating in Ethnic Tourism?," 立命館大学「貧困の文化と観光」

研究会国際シンポジウム報告集『社会的弱者の観光を通じての自立と自律』、158~173, 2008、無査読。

23 村瀬 智、「ベンガルのパウルの適応戦略とツーリスト・スポットとしてのブルプール・サティネケタン」立命館大学「貧困の文化と観光」研究会国際シンポジウム報告集『社会的弱者の観光を通じての自立と自律』174~187, 2008、無査読。

24 Ikemoto, Yukio, "Human Development and the Role of Tourism- from Capability

Approach," 立命館大学「貧困の文化と観光」研究会国際シンポジウム報告集『社会的弱者の観光を通じての自立と自律』、188~198, 2008、無査読。

25 Yamamoto, Yuji, "Sukumbasi Transformation from Communitas to Community: The Birth and Death of Proto-Charisma," in H. Ishii, D. Gellner, K. Nawa (eds.) *NEPALIS INSIDE AND OUTSIDE NEPAL, Social Dynamics in Northern South Asia (Vol.1)* New Delhi: Manohar: 115-158, 2007, 査読無。

26 石井香世子、「越境者から市民へ：タイ山地民の国籍管理を事例として」関根政美・塩原良和編『多文化交差世界の市民意識と政治社会秩序形成』慶応義塾大学出版会：189~206, 2007、査読無。

〔学会発表〕(計21件)

1 David Peaty、「ペルーとボリヴィアにおけるコミュニティ・ベースド・エコツーリズム」国際シンポジウム[社会的弱者の観光を通じての自立と自律]、2008年11月1,2日、立命館大学

2 藤巻正己、「「マレーシアにおける貧困問題の地域的・民族集団的多様性に関する研究」と社会的弱者およびツーリズム」2008年11月1,2日/立命館大学)

3 江口信清、「ツーリズム：マレーシア・マラッカにおけるポルトガル人にとっての生存の鍵」国際シンポジウム[社会的弱者の観光を通じての自立と自律]、2008年11月1,2日、立命館大学

4 石井香世子、「誰が山地民なのか：エスニック・マイノリティはエスニック・ツーリズムに参加して「よい生活」を得ることができるのか」国際シンポジウム[社会的弱者の観光を通じての自立と自律]、2008年11月1,2日、立命館大学

5 村瀬 智、「ベンガルのパウルの適応戦略

とツーリスト・スポットとしてのブルブル・サティネケタン」, 国際シンポジウム[社会的弱者の観光を通じての自立と自律]、2008年11月1,2日、立命館大学

6 池本幸生、「人間開発とツーリズムの役割：ケイバビリティ・アプローチの観点から」, 国際シンポジウム[社会的弱者の観光を通じての自立と自律]、2008年11月1,2日、立命館大学

7 山本勇次、「コメント」, 国際シンポジウム[社会的弱者の観光を通じての自立と自律]、2008年11月1,2日、立命館大学

8 江口信清、「観光化に係わる女性の地位の変化と外部支援—ガイアナのアラワク人の事例—」, 第41回日本文化人類学会研究大会、2007年6月2日、名古屋大学

9 石井香世子、「「見せる」少数民族・「見られる」少数民族 北タイ山地民と観光の事例から—」, 第41回日本文化人類学会研究大会、2007年6月2日、名古屋大学

10 村瀬 智、「インド社会の変化と宗教的芸能集団の適応戦略」, 第41回日本文化人類学会研究大会、2007年6月2日、名古屋大学

11 山本勇次 「観光都市の発展と貧困地域母親会の経済的自立運動 ポカラ市の貧困女性によるマイクロファイナンス・プロジェクトの功罪」, 第41回日本文化人類学会研究大会、2007年6月2日、名古屋大学

12 四本幸夫、「行政による観光開発と貧困層への影響 フィリピンの「ルーラル・ツーリズムのための企業家創出プログラム」に関する評価」, 第41回日本文化人類学会研究大会、2007年6月2日、名古屋大学

13 藤巻正己・Norizan Md Noor・Tarmiji Masron、「キャメロンハイランドのツーリズムとオランアスリ社会」, 人文地理学会研究大会、2007年11月18日、関西学院大学

14 Eguchi, Nobukiyo, “Differences in Intention between the Actors over

Ecotourism A Case of Tourism in Dominica,” International Symposium on Intercultural Communications, February 17, 2007, Kobe University

15 石井香世子、「調査報告：北タイ山地民の保持貨幣とその今日的意味」, ワークショップ『東アジア史における貨幣と信用』、2006年12月1日、東京大学東洋文化研究所

16 江口信清、「カリブ海地域の不法占拠地・スラム社会における自生的リーダーシップとジェンダー」第40回日本文化人類学会研究大会、2006年6月4日、東京大学

17 村瀬 智、「インド・ベンガル州の地方都市スラムにおける生活改善運動と自生的リーダー」第40回日本文化人類学会研究大会、2006年6月4日、東京大学

18 山本勇次、「ネパール・ポカラ市のスクンバシ集落の自生的リーダー群におけるジェンダー別の役割行動」第40回日本文化人類学会研究大会、2006年6月4日、東京大学

19 Eguchi, Nobukiyo, “I don’t want to be Faust- Ethnic Tourism in the Era of Globalization”, Globalization Studies Network, Third International Conference, 21-23 August, 2006, Universiti Kebangsaan Malaysia

20 Ikemoto, Yukio, “Tourism and Globalization: Diversity for What?,” Globalization Studies Network, Third International Conference, 21-23 August, 2006, Universiti Kebangsaan Malaysia

21 Ishii, Kayoko, “Creating Diversity in the Era of Globalization: from Lisu to “Hill Tribes,” from “Hill Tribes” to Ethnic Minority,” Globalization Studies Network, Third International Conference, 21-23 August, 2006, Universiti Kebangsaan Malaysia

〔図書〕(計3件)

江口信清、『スラムの生活改善運動の可能性—カリブ海地域の貧困とグローバリズム』、明石書店、2008年、221頁。

江口信清・藤巻正己編著、『グローバル化とアジアの観光』、ナカニシヤ出版、2009年、246頁。

石井香世子、異文化接触から見る市民意識とエスニシティの動態』、慶應義塾大学出版会、2007年、274頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

江口 信清 (EGUCHI NOBUKIYO)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：

### (2) 研究分担者

藤巻 正己 (FUJIMAKI MASAMI)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：60131603

ピーティ デヴィッド (PEATY DAVID)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：80247808

山本 勇次 (YAMAMOTO YUJI)

大阪国際大学法政経学部・教授

研究者番号：50114806

村瀬 智 (MURASE SATORU)

大手前大学・メディア芸術学部・教授

研究者番号：50331707

瀬川 真平 (SEGAWA SHINPEI)

大阪学院大学・国際学部・教授

研究者番号：90206615

池本 幸生 (IKEMOTO YUKIO)

東京大学東洋文化研究所・教授

研究者番号：20222911

石井 香世子 (ISHII KAYOKO)

名古屋商科大学外国語学部・准教授

研究者番号：50367679

### (3) 連携研究者

#### (4) 研究協力者

四本 幸夫 (YOTSUMOTO YUKIO)

立命館大学文学部・非常勤講師

研究者番号：50449534

古村 学 (KOMURA MANABU)

龍谷大学社会学部・非常勤講師